

原始佛教における帰依と業

吉 元 信 行

一 在家道と業

原始佛教の実践道は、出家道と在家道に大別される。出家道の実践大綱は、戒・定・慧の三学であり、その徳目は、信・勤・念・定・慧の五法を以て示される。これに対して、在家道では、施・戒・生天の三論が実践大綱であり、その徳目は、信・戒・聞・施・慧の五法である。^①この出家道と在家道の『五法』は、ともに『信』に始まって『慧』に終わっている。このことは、佛教の実践道は、在家・出家を問わず、信を入門として、慧を最終目的とすべきことを教えるものである。

勿論、あらゆる宗教は、その信者達の信すべき信条というものを示している。それは、人の宗教性を呼び覚まし、更にその宗教生活に導いてゆくべきものである。その信条とは、宗教に具体的形状を与え、いわば、そこに信者達が集まるための教理を導き出すものである。そうすれば、この信条は宗教の制度上の形態のものになるものであると言えよう。逆に言えば、その信条がなければ、宗教の組織的形態もありえないことになる。実際、制度上の形態として組織されていなければ、いかなる宗教活動も効果なく、成功もしない。佛教もこの例外ではなく、佛教へ

の入門として、更にその全構成員の共通の信条として、佛・法・僧の三宝に対する帰依を掲げているのである。^②従って、佛教における信の第一歩はこの三宝帰依であるということが出来る。三宝に対する帰依の表白として、經典には次の様に説かれている。

Buddham saraṇaṃ gacchāmi, Dhammaṃ saraṇaṃ gacchāmi, Saṅghaṃ saraṇaṃ gacchāmi, (Khp. No. 1)

この佛・法・僧の三宝に対する帰依の表白は、出家・在家を問わず、佛教徒の共通の信条である。この三帰依を徹底したものととして、在家道にあっては、佛・法・僧の三宝に聖戒成就を加えた四つの徳目に対する淨信、即ち四不壞淨が説かれる。そしてこの帰依や不壞淨は、信の積極的な面であるところの憶い起して忘れまいとする『念』なる概念と結びつき、佛・法・僧・戒という四つの徳目に施とその結果である生天を加えた六随念というきわめて在家的な実践道へと展開するのである。^③

佛・法・僧・戒・施・天という徳目の上に六随念の成立過程を考察していくとき、そこに、帰依↓不壞淨↓随念という展開の必然性を認めることができる。そして六随念は、出家道にあっては、信・勤・念・定・慧の五法によって十随念へと展開し、更に四十業処の中に教えられるようになる。^④

以上述べた様に、三帰依は、佛教において第一に掲げうるべき実践徳目としての信の第一歩になるものであった。即ち、帰依は信の具体的表白であるとともに、あらゆる実践道の基本ともなるべきものである。

この信について俱舍論では次の様に説明している。

「信 (śraddhā) とは心の清淨である。〔四〕諦と〔三〕宝と業果 (karma-phala) に対する確信であると他の人々は [cāraṇa]」 (Ak. p. 55)

信とは先ず心を清浄にして、佛教の真理である四諦を信じ、三宝に帰依し、人生の道理である業果を信ずることであるとする。この中の業果について、称友が「善・不善なる業と愛・非愛なるその果」(Ak. p. 128)と註釈しているように、業果を信ずるとは、業報輪廻の思想を信ずることに他ならない。

業報輪廻の思想は、印度では佛教以前既にヴェーダにその先驅を見、初期ウパニシャッド時代には成立していたとされている。^⑤ 善をなせば幸福なる果報があり、不善をなせば不幸なる果報ありとするこの業報思想は、ウパニシャッド以後の印度においても主流をしめ、それが佛教にそのまま受け継がれたのである。

ところが、佛教では、他の学派の様な輪廻の主体を認めず、業自体が輪廻するとの立場をとった。ここに佛教は当時の印度一般の思想であった業報説を更に高めて、佛教独自の業思想を打ち立てたのである。この佛教の業思想は、北伝阿毘達磨に至って更に詳しく分析論議され、佛教の業思想としての哲学的地位を確立するに至る。

この様な立場からすれば、佛教が佛陀当時に採用した業報説というものは、ごく低い立場の通俗説で、当時の民衆の一般常識にすぎないとも言える。しかし、佛教本来の立場からすれば、根本教義である四諦や十二縁起の教えも業報説の基礎の上に立てられたものである。また、在家道の実践大綱たる施・戒・生天の三論も正しく業報説を具体的に述べたものであった。このようにして、佛教の初歩的段階である在家佛教にあっては、信を説くと同時に、この業思想の正しい理解に先ず主眼がおかれるのである。

この在家佛教における業思想を、在家者のためにわかりやすく説いた論書として、在家道の代表的綱要書として知られる *Upasakajanalakāra* をあげることができる。

II Uṣākaśālanāṅkāra における業

Uṣākaśālanāṅkāra (以下Uと略す) は、十二世紀頃、セイロンで Ānanda という論師が著わしたもので、当時のセイロン上座部の中心学派であった大寺派における在家佛教の綱要書である。本書の主要な特色は、第一に、一般に出家中心の南伝佛教の中で、特に在家道の意義を高揚したことであり、第二には、十二世紀述作という比較的新らしい論書であるにもかかわらず、その内容は殆んどパーリ聖典からの引用や取意であり、パーリの龐大な聖典の中から在家者のための教説をピックアップし、集大成したものということである。従って、本書は十二世紀のものであっても、その内容は正しく原始佛教の在家道の意義を説いたものであると言える^⑥。

Uでは全体が次の様な九章によって構成されている。

- (1) 帰依戒の解説
- (2) 戒の解説
- (3) 頭陀支の解説
- (4) 命 (ajiva) の解説
- (5) 十福業事の解説
- (6) 障法の解説
- (7) 世間相應の解説
- (8) 出世間相應の解説

(9) 福德果成就の解説

この中で、第一章帰依戒の解説が終って第二章戒の解説の劈頭に次の様な一短文が置かれている。

「ところで、(1)このようにして帰依をなした優婆塞・優婆夷は、(2)戒に住し、(3)ふさわしい頭陀支を行ずることによってそれを浄化して、(4)五種の「悪い」商売を止め、正しい法に従って命(生活)をなすことによって『優婆塞蓮華』などの状態に達し、(5)日々、十福業事を満して、(6)障法を断じ、(7)世間・(8)出世間相応を成就すべきである。」(Uj. p. 147) ()の数字及び――は筆者のつけたもの

ここに、結論と見られる第九章を除いた前八章のすべてが織り込まれている点が注目される。そして、「このように帰依をなした」云々と言って、第一章をまとめ、その上で第二章以下の各論をあげていることから、第一章は序論であると見ることができる。そしてここに各章の関係を見ることがによって、本書全体の構成を知ることができる。^⑦それを図示すれば次の様になるであらう。



ここに(1)帰依戒→(9)福德果成就の関係は明かに業思想の上に成立していることが判明するであらう。すなわち佛教への入門である帰依によって信を得、戒を持し、頭陀支を修するという宗教生活は、具体的には十福業をなし障法を捨てることによって成立する。そういう正しい宗教生活をする者は、世間と出世間の幸福を得、更に福德の果を成就するのである。

ここで説かれた業は、後の佛教内部で発達した阿毘達磨的業思想ではなく、在家者のための善因善果・惡因惡果

という本来の業報思想である。そして、この業報思想の上に帰依と業の關係が認められる。この様な原始佛教における帰依と業の關係について、Uの所論に従って論究しよう。

三 帰依と業の關係

Uでは、その劈頭に、本論述作の意趣を偈で説いて、その直後に、本論がまさしく佛説であることを述べている。その理由は、ここに帰依等の徳と完全なる増上戒が説かれているからであるとされる。そして、本論が十二世紀述作であるにもかかわらず佛説とするところに、パーリ聖典からの在家道の集大成と佛陀当時にかえらんとする著者の自負が伺われる。

次に、「そこでマハーナーマよ、優婆塞は佛に帰依するものであり、法に帰依するものであり、僧に帰依するものであるというこのことだけでマハーナーマよ優婆塞がある」(A. IV. p. 220) という經典を引用し、在家信者は三帰依によって成立することを明らかにする。このことについて更に次の様に説く。

「それ故に、まったく真実なるものを保持する如く、すべての優婆塞達の徳である三宝のみが依所(Patittha)である」(Uj. p. 124)

この様な三宝帰依は、正しく帰依經(Saraṅgamanasutta)^⑩に説かれたものであることを強調し、Uではその經の利益を種々の観点から詳しく説明し、それを次の様な偈にまとめている。

利益を示しよく説き「産み出し」

或は流し出すからである

また庇護により経と同じであるから

経をスッタと言う^⑪ (Uj. p. 125)

更に帰依経の説示について、次の様な四つの質問が提出され、この質問に対する回答が本論第一章の内容として構成されるのである。

「そこでまた、この経は、(1)誰によって (Kena) 説かれたのか、(2)どこで (Katta) 説かれたのか、(3)いつ (Kada) 説かれたのか、(4)何故に (Kasma) 説かれたのか。」 (Uj. p. 125)

本論では、この四つの質問に対して、それぞれ因縁物語を加えながら詳しい説明がなされるのである。この中で(1)、(2)、(3)については佛伝を説くことによってその回答がなされる。そして、この佛伝はパーリ諸聖典から随意に引用・取意されて構成されている。^⑫

第四の質問については次の様に回答される。

「何故に説かれたかとは、出家のため、そして具足戒のためである。それだけで、何故に説かれたかというこの問が回答された。」 (Uj. p. 134)

ここに、在家道の究極は出家道にあることを明らかにし、その理由として、三帰依の詳しい解釈や分析が為されそれが本論第一章の主題として展開するのである。そして、これら四つの問に答えることによって疑問が晴れるであろうとして、教説入門をめざす者のために次の帰依経の偈を引用する。

文字 (vyañjana) の意味に無知なるものは
本性 (bhāva) の意味を悟らな

それを正しく悟らないものは

実践 (paṭipatti) について疎くなる

それ故に佛と法と僧は帰依処にして

更に「そこに」私は行きますという

これらの意味をとって詳述し (adōpavaniya)

更にまた、業の目的 (payojana) と区別等と

果とを、信 (pasāda) を生ぜんために

恭敬して我々は説きましよう (Uj. pp. 134-135)

この偈の中に在家佛教における帰依と業の關係が説き示されている。すなわち、佛教の信というものは、帰依の意味をよく知ることであり、更に業の目的・区別・果等を知ることによって成立するとされるのである。このことは、信を四諦と三宝と業果に対する確信であるとする俱舍論の説と相通するものである。この帰依經の偈に従って U では詳しい三帰依についての分析がなされるのである。

四 佛・法・僧について

先の帰依經の偈に「文字の意味に無知なるものは本性の意味を悟らない」と説かれたが、本論では、佛・法・僧の三宝について、文字と本性の両面からその意味の考察がなされる。以下、その所論に従って解説しよう。

〈佛〉

先ず、佛 (Buddha) についての文字の上からの説明は、言葉 (sadda) と種性 (dhatu) の二点から為される。

言葉という点からすると、佛とは「諸々の真理の成覚者 (bujjhitār)」或は「人々に覚らしめる者 (bodhetār) (Uj. p. 135) であると解釈される。これは Buddha を budh を語根とする過去分詞 bujjhita + ar と使役分詞 bodheta + ar の両面から分析していることになる。このことは、佛教一般において、佛を「自覚覚他」と解釈するのに会通する。例えば、涅槃經第十八に次の様に説いている。

「佛とは覺に名づく。既に自から覺悟し、復た能く他を覺せしむ。」(大正・12・四六九c)

また、佛を種性という点から説明すれば、「警寤 (jāgarana)」と「開花 (vikarana)」であるとされる。「警寤」とは「ものごとの自性を見るのを遮ざる無明と称された睡眠を、聖道ともなる熏習 (āsaṇa) が断じたものであるから、それ(睡眠)を究極的に離脱したものである」(Uj. p. 135) と説明される。このことは、菩提資糧論第一に「覺とは覺寤を義と為す、無智の睡を離るるを以ての故に」(大正・32・五一七b) と説かれるに会通する。

「開花」については他の經論に同様の説明はなく、次の様なU獨特の解釈が為される。

「最高のすばらしい吉祥なる光輝に会って蓮華が開く如く、限りなき徳の聚に莊嚴された一切知性智に会うことよって「覺りの花が」開花される」(Uj. p. 135)

次に、佛の本性の意味の説明は次の如きである。

「波羅蜜を遍修せるものは、独存者 (佛) の智ともなる熏習によって、煩惱を残らず離れ破壊するものであり、大悲と一切知性智等のはかり知れない徳の聚を保持するという蘊相続が佛である」(Uj. p. 135)

このことからすると、Uでは、佛の本性の意味を、第一に煩惱からの離去と破壊と、第二に徳の聚の保持という二点から説明していることになる。この佛の本性の意味を更にはっきりさせるため、Uでは次の様な『天宮事(Vimānavatthu)』の偈を引用し、佛の徳を讃嘆して佛についての説明を終わっている。

人中の最勝者 釈迦牟尼世尊は

作すべきことは已に作し

彼岸に到り 力と精進具せるもの

かの善逝に 帰命せよ (Uj. p. 135, Vv. p. 51)

〈法〉

法 (Dhamma) について文字の説明は、次の様に dhr (保持する) を語根とする dhareti という言葉で説明される。

「法とは、ここで、証得道と作証滅が、教示されたとおりに実践されているとき、悪処の苦と輪廻の苦に堕ちないで、〔道と滅を〕保持する (dhareti) から法 (dhamma) である。」 (Uj. pp. 135-136)

俱舍論でも、「自相の保持 (dhāraṇa) からいつ法 (dharma) である」 (Ak. p. 2) とやはり dhr を語根とする dhāraṇa なる語で説明している。

また、法の本性の意味は、

「四聖道と四沙門果と涅槃と教法という点で十種であり、それが法であるという意味である。」 (Uj. p. 136)

と説明され、更に次の様な天宮事の偈を引用して法の徳を称賛する。

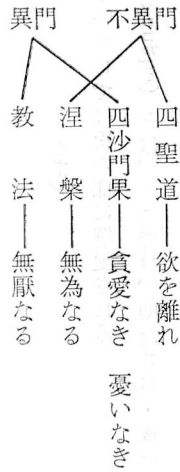
欲を離れ 貪愛なき 憂いなき

無為なる 無厭なる法にして

美味なる この熟達せる

よく整理されたこの法に帰命せよ (Uj. p. 136, Vv. p. 51)

Uでは、先の十種の法を不異門 (nipparyāya) 異門 (pariyāya) の立場から、次の様にこの天宮事の偈に対応せしめている。



すなわち、欲を離れるための四聖道と無為なる涅槃は絶対的事実である不異門として、また、貪愛なき憂いなき四沙門果と無厭なる教法は相対的の根拠である異門として、悪趣等より道と滅を保持するから法と言われるのである。そして、その「保持 (dharana)」という語を「悪趣等によって発生した煩惱を破壊すること (viddhamasana) である」(Uj. p. 136) と積極的に言いなおしている。

ところで、ここで説かれる不異門と異門について、Uでは更に詳しい説明がなされる。不異門については、「聖

道は煩惱を断つものとして、涅槃は所縁の状態として、それがかの利益成就の因を有すること(hetuka)」とされる。また、異門については、「聖果は道によって断じた煩惱の止滅作用のために、道に相對して起つたもので、教法はその証得の因(hetu)である」(Uj. p. 136)と説明する。このことは、不異門が利益成就の因(根拠)を有するといふ絶対的事実の立場であり、異門が相對的因(根拠)であることを示すものである。尚、異門と不異門についてはそれを根拠と事實に對應せしめた佐々木現順博士の論稿がある¹³⁾。

〈僧〉

僧についてUでは次の様に解説される。

「僧(Sangha)とは、ここでは、聖なる見・戒一致してともに聚つた(samhata)・連結した(ghaita)ということである。かの道果(magga-phala)において、煩惱と苦患が、断と止滅という点で、完全に打倒せられた(ghaita)ものであるから、僧とは八聖人衆(aṭṭha-ariya-puggala-samūha)であると説かれた。」(Uj. p. 137)

この中で、Uでは、僧についての文字の説明は、第一に bh (to take) を語根とする samhata (集められた)、第二に ghai (to unite) を語根とする ghaita (連結せられた)、第三に han (to smite) を語根とする ghaita (打倒された) という三点からなされる。

また、本性の意味からすれば、道果とは四向四果のことであり、八聖人衆とは八輩のことであるから、僧の本性的意味は四雙八輩であることを示している。そして、このことについて更に次の様な天宮事の偈を引用して僧の徳を称賛する。

そこで彼らは 大果ある所施を説き

四雙において 八輩と十法をもてるもの

この僧に 帰命せよ (Uj. p. 137, Vv. p. 51)

ところで、Uではこのあと、特に凡夫僧 (poṭṭujāṇika-saṅgha) に言及している。このことは、本論が在家佛教の書であることを如実に示すものである。

「凡夫僧も、以前には行道に住したものであるから、以前の思いのとおりに施をなせば、ここでは僧であると思ふべきである。何故なら、たとえ彼が聖なる見と戒を持った沙門として聚められないとしても、出離を欲する部類に属する凡夫として聚められたものであれば、供養さるべき、崇拜の価値ある僧であると知るべきである」(Uj. p. 137) ここでUでは、出離を欲するものであれば凡夫でも僧と呼ばれることを説いている。このことは、大乘本生心地観経第二に「世・出世間に三種の僧あり、一に菩薩僧、二に声聞僧、三に凡夫僧なり」(大正・3・二九九c)とし、更に次の様に説かれていることに会通する。

「若し別解脱戒を成就せる真善の凡夫、乃至一切の正見を具足し、能く広く他の為に衆の聖道の法を演説開示して、衆生を利益することあるものを凡夫僧と名づく。未だ無漏の戒定及び慧解脱を得ること能わずと雖も、而も供養する者は無量の福を護ん。」(大正・3・二九九c～三〇〇a)

以上の様に、Uにおける佛・法・僧についての解釈は、文字の上からと本性の意味からの二面によって詳しくなされた。次に『帰依』についての解釈を見よう。

五 帰依と業

『帰依 (sarana)』は *sri* (to resort) を語根とする名詞形で『避難処』という意味である。このことについて大毘婆沙論第三十四では「救護の義は是れ帰依の義なり」(大正・27・一七七c)とし、また、俱舍論では次の様に有衆師の説として語義解釈を与えている。

「それでは帰依の義は何であるか。救護 (trana) の義が帰依の義である。それを所依とすることによって、すべての苦を無限に脱するからである。」(Ak. p. 217)

ところで、この様な一般の「救護」という帰依の受動的意味に対して、Uでは次の様な能動的意味を与えている。「帰依とは、ここでは、驅逐する (himsati) ということで帰依である。まさにその帰依することによって、帰依するもの (saraṇagamana) たちの恐怖・戦慄・苦・悪趣の苦痛を驅逐する、〔すなわち〕追放する (vināseti) という意味である。」(Uj. p. 137)

この中で、Uでは *sarana* を *himsati* (驅逐する)^⑭ という言葉で説明しているが、このことは *sarana* の語根を *sri* (to depend on) でなく *sri* (to crush) と見たことを示すものであろう。^⑮ ともかく、Uでは *sarana* に悪を驅逐するという意味をその語源から導き出そうとしているのである。帰依は避難処であるという第一義をここに示さず、驅逐するという能動的意味を第一にあげたのは、この帰依に何らかの実践的意味を見出そうとしたものに他ならない。次にUでは、佛・法・僧の三つの差別という点から帰依を解釈する。先ず佛について次の様に説明する。

『比丘よ、具足戒にして住せよ』(A. II, p. 14) 云々と利益を「説いて」激励することによって、更に『実に殺

生には悪い果報 (vipakka) もてる来世あり』 (M. III, p. 203) 云々といつて、不利益を転還することによって、佛はまた有情の恐怖を駆逐するから帰依である。」 (Uj. pp. 137-138)

ここに、善因善果・悪因悪果の業報思想を説くことによって佛帰依が解釈される。すなわち、具足戒に住するという正しい宗教生活の利益を示し、その逆である殺生に悪い果報ありという不利益を示すことによって、それを転還する。そういうように、利益をおしすすめ、不利益を転還することによって、佛は有情の恐怖を駆逐するのである。

法帰依については、「存在 (bhava) を難路 (kantara) という点から「見ると」、救済 (uttara) と安息を与えることによって、法も有情の恐怖を駆逐するから帰依である」 (Uj. p. 138) として、saraṇa を救済と安息という本来の意味によって解釈している。

また、僧帰依についても、「施と供養からすれば、恭敬をもちたすものに大果を獲させるといふ点で、僧も有情の恐怖を駆逐するから帰依である」 (Uj. p. 138) と、同じく業報思想によって解釈している。

以上の様に、帰依とは、業報思想を信することによって、その者の恐怖を駆逐するものであった。ここにおいて帰依が業の思想と結びつくのであろう。この様な立場から、Uでは次の經典の句を引用して、帰依と業との関連を述べている。

「若者よ、有情は自ら業をもてるもの、業の相続者、業を胎藏するもの、業に縛せられ、業を帰依所 (paṭisaṇa) とするものである。」 (Uj. p. 138, M. III, p. 203)

この經典の句は、阿含の業思想を問題にするとき好んで引用されるものである。この句は、実は次の様な在家者

の質問に対する釈尊の答なのである。

「ゴータマよ、いかなる因といかなる縁あつて、人間生存の間には優劣の性が見られるのか。」(M. III, p. 202)

この中の優劣の性の内容として、この經典では、短寿・長寿・多病・無病・醜陋・容麗・權勢・弱勢・貧・富・卑・尊・愚・賢等をあげている。

この様な様々な優劣の性の因縁として、釈尊は前述の經の如き業思想を説いたのである。人間生存の差別の因縁は業に尽きるとするこの經典の所説は、一見、宿命論の様にも見える。しかし、佛教の業思想は決して宿命論ではない。^⑩この釈尊の所説が宿命論でない根拠は、同じこの經典の文中に見出される。それはすなわち「業を歸依所とする」の文句に他ならない。「有情は自ら業をもてるもの、業の相続者、業を胎藏せるもの、業に縛せられ」というこれらの内容は所謂宿命論とも言えるかもしれない。しかし、最後の一句である「業を歸依所とする」ということで、善なる歸依所を業とすることによって、有情は自ら善業をもち、善業を相続し、善業を胎藏し、善業に縛せられ、その結果、善なる大果を得ることができるのである。すなわち、前の諸句である宿命論的業説が、積極的な業説へと転還されるのである。このことをUでは次の様に説明する。

「ここでは、有情にとって、自らによって作られた悪処と恐怖を破る善〔業〕のみが歸依所である」(Uj. p. 128) すなわち、過去に自ら作つた悪業であっても、今、善業のみを歸依所とすることによって、善なるものへと転還できるのである。その様なところにUでは更に次の様に説いている。

「更にまた、〔佛・法・僧の〕三事 (tathattva) は歸依の所縁であるから、〔その所縁に〕近づくことによつて歸依であるといわれる。すなわち、このようにあるとき、あらゆる善業も歸依の本性に密着するものであるから

善心を具足したある者は、すべて帰依した者であると言ふべきである。」(Uj. p. 138)

ここに今度は業が帰依と結びつく。すなわち、あらゆる善業が、佛・法・僧の三帰依に集約されてくるのである。善心を具足せる者の作す善業は帰依の本性に密着せるものであった。その帰依の所縁が佛・法・僧の三宝である。その三宝は、善心すなわち善業の所縁である。

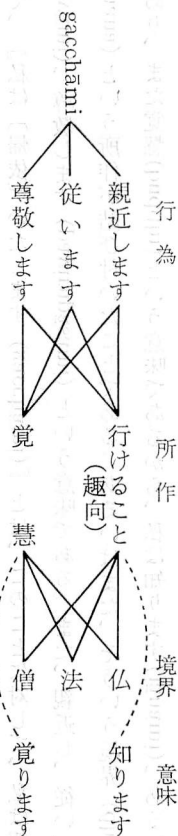
先に、帰依が業報思想を信ずることによってその者の恐怖を駆逐するという点で、帰依→業の関係を明かにした。ここでは逆に善業が帰依に集約され密着するという点で、業→帰依の関係が明かにされたのである。

六 業の目的と帰依

帰依は、具体的には：Buddham (Dhammam, Saṅgham) saraṇam gacchāmi” (佛・法・僧に私は帰依いたします) という表白を以て示された。前々節において Buddha, Dhamma, Saṅgha の内容を、そして前節において saraṇa の意味を究明し、そこに帰依と業との相互の關係が明かにされた。最後に gacchāmi のもつ意味を明らかにして在家佛教における帰依と業の意義を確かめたい。U における gacchāmi の解釈は次の如きである。

「ちよ、『私は「帰依」いたします (gacchāmi)』とは、このことに對して、私は親近します (bhajāmi) 、従います (sevāmi) 、尊敬します (payirupāsāmi) という意味である。また、親近し、従い、尊敬せる彼らに、行けること (gamaṇa) という所作が結び付いたことである。あるいはまた、そういう境界 (dhatu) に對する趣向 (saṭi) の意味であり、また覺慧 (buddhi) という意味であるから、私は知ります (jānāmi) 、あるいは私は覺ります (pujijāmi) という意味が知らるべきである。」(Uj. p. 139)

このUにおける gacchāmi の解釈を図示すれば次の様になるう。



ここに、佛・法・僧という境界に対する趣向と覚慧という二つの所作が、親近・従属・尊敬という三つの行為に結びつき、『知ります、覚ります』という意味になるということで gacchāmi が解釈された。

以上論究した様に、三帰依はそのまま善業としての業に直接結びつくものであった。その業の目的についてUでは次の様に説いている。

「業の目的 (Pavojana) とは、すなわちここでは、世尊が先ず最初に出家の姿を見て、そこに生じた「出家への」愛樂をもって出家し、菩提の座に登り、「そこで」証得した四諦の法をもって佛たること (Buddhabhava) を得達したことである。或はまた、未来において、世尊が佛・法の二宝を証得するとき、僧宝にも依存していた「ことになる」から、逆の次第によって、あたかも「三」帰依によって解脱した如くに見られる」(U: p. 140)

ここにおいても、帰依と業との関係が認められる。すなわち、業の目的とは佛たること (佛性) の得達である。それは法の証得によって完成する。更に、佛・法・二宝の成就是僧宝に依存することによって成立する。僧伽なくしては佛も法も意味がなくなるからである。従って、業の目的とは三帰依ということになる。この意味からすれば、釈尊は三帰依によって解脱したとも言えるのである。

更にまた、Uでは帰依と信の結びつきを次の様に説明している。

「それ故に、佛を所縁として、帰依と信 (*pasāda*) に行きますという意味が見らるべきである。」(Uj. p. 140)

このことについて、Uでは更に世間的帰依と出世間的帰依を説く中で次の様に述べている。

「この帰依には出世間と世間との二種あり。そこで、出世間の帰依は現前なる諦の道利那において、煩惱を断絶するものであり、所縁という点からすれば、涅槃の所縁となつて、三宝に対する淨信 (*avēcappasāda*) によつて成就する。また、世間の帰依は、凡夫が帰依によつて随煩惱を消除することにより、佛等の徳を所縁として成就せられる。そのことを機会として、三宝への信 (*saddhā*) を得たるものと信の根 (*mulika*) を正見するものとなる。そこで信を得たるものは、母等によつて激励された子供の如く、「たとえ」徳について確定していなくとも、慧を離れた心によつて信 (*pasāda*) の所作が見らるべきである。また、正見するものとは見正業者 (*ditthijukamma*) と同じである。」(Uj. p. 143)

ここに説かれる様に、出家者のための出世間的帰依は、煩惱の断絶をめざし、涅槃を所縁として、三不壞淨とともに成就するものであった。また、在家者のための世間的帰依は、随煩惱の消除をめざし、三宝の徳を所縁として三宝への信を成就するのである。この三宝への信を得たものは、たとえ慧より離れその三宝の徳がはっきりしなくとも、母を信ずる子供の如く、信の所作が見られるのである。このことをまた正見とも見正業とも説いている。ここに在家者の帰依が正業と言われるのである。

また、先にも論及した如く、三宝の徳を所縁とした信ということは、そのまま三宝に対する随念 (*anussati*) に展開する必然性をもつものであった。^④ Uにおいてもこのあと随念についての説明がある。

「三宝の」徳を信じ随念し

三帰依を賞賛する人々は

見正業者の中の聚に至り

疑惑がない (Uj. p. 144)

あるいは次の様にも説かれている。

「而して在家者或は出家者は『かくの如く彼は世尊・阿羅漢・正等覺者なり』云々という『佛・法・僧隨念業処 (Buddha-dhamma-saṅghānussati-kammaṭṭhāna) を最勝なる所依とすることによって、佛と法と僧に帰依するものである。』 (Uj. p. 157)

この様にして、Uにおいても、帰依↓信↓隨念という実践道の展開が説かれている。それも業との関連においてである。筆者は以前に、六隨念の成立過程について論究し、佛道実践の先頭に立つべき『念 (saṅkhi)』が、三帰依や四不壞淨と結びついて六隨念へと展開したことを見出した。その理由は、帰依の所縁である佛・法・僧の三宝に、在家道の実践大綱である施・戒・生天の三論、あるいは、信・戒・聞・施・慧の五法の概念が結びついたものであった。^⑧ 前にも言及した如く、この三論や五法は明らかに業報思想によるものであった。

このことからすると、三帰依を四不壞淨や六隨念、更には十隨念へと展開させたのは業の思想に他ならない。筆者は、以前に「六隨念の起源ということを一〇で言えば、帰依三宝と念の結合であると言えよう」^⑨と述べたことがある。以上の所論からするならば、帰依三宝と念を結びつけたものが業であるということができる。すなわち、佛教入門の第一歩である三帰依が業思想によって種々の佛教の実践道として展開するのである。ここに原始佛教に

おける帰依と業の関係を認めることができよう。

註

- ① 拙稿「十随念の成立過程」佛教学セミナー11（京都・昭四五）三八頁参照。
- ② H. Saddhatissa (ed.): *Upāsakajāṇālikāra*, PTS, London, 1965, p. 6.
- ③ 拙稿「六随念の成立過程」印佛研18—1（東京・昭四四）一七七—一八〇頁参照。
- ④ 拙稿「十随念の成立過程」佛教学セミナー11（京都・昭四五）三八—五九頁参照。
- ⑤ 赤沼智善「佛教教理の研究」（破塵閣・名古屋・昭一四）四三—頁参照。cf. G. H. Sasaki: *Social and Humanistic Life in India*, Abhinav Publications, New Delhi, 1971, p. 191.
- ⑥ cf. K. R. Norman: *Reviews of Books "Upāsakajāṇālikāra"*, *The Journal of Royal Asiatic Society*, 1966, 3/4, p. 155. 拙稿「Upāsakajāṇālikāra 述作の意趣」印佛研19—2（東京・昭四六）三三—三三頁参照。
- ⑦ 桜部建「書評『Upāsakajāṇālikāra』佛教学セミナー4（京都・一九六九）七九頁参照。
- ⑧ 拙稿「Upāsakajāṇālikāra 述作の意趣」印佛研19—2、三三四頁。
- ⑨ 同、三三五頁にその偈を訳出。
- ⑩ 「帰依経」は、Uではこれを含めて三回引用されている（p. 124, 134, 139）が、筆者は未だ現存經典中に出現を見出し得ない。ただ、引用箇所の前後からしてみると、この *Sarāṇāgamanasutta* なる經典が当時存在しており、それが本論述作の所依の經典であったことは推測される。
- ⑪ この偈は *Dhammapada-aṭṭhakathā* p. 17 と *Atthasālinī* (BOS) p. 17 にあるのべ、それらによって「産み出す」の語を補う、また *suttānaṃ* と *suttānā* (庇護) と修正して訳した。
- ⑫ Uにおいて説かれる佛伝は *Jātaka*, *Dhammapada-aṭṭhakathā*, *Atthasālinī* 等の佛伝より引用・取意されて構成されている。

- ※
略号

1967.

Uj.....H. Saddhatissa (ed.): Upāsakajanālaṅkāra. (福王)

それ以外のパリーテクストの略号は A Critical Pali Dictionary の Bibliography による。

（昭和四十八年度文部省科学研究費、一般研究Cによる研究成果の一部）